
平等に差別される世界で

東波 広

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平等に差別される世界で

【Nコード】

N6137X

【作者名】

東波 広

【あらすじ】

序章 - 創世の主人公、囚^{シユウ}。
虐待されて育った彼は母親の死と共にそばに寄り添う者を見つけるため世界の理を変える。

一章 - 最弱の主人公、命^{ミコト}。

『異常研』の合宿で会長が触れた石がきっかけでこの世界に転生した彼ら、最弱の異能(?)を持つ。

主人公リレーします。

キーワード変更しました。

全ての始まり（前書き）

作者はたびたびスランプに陥ります、ご注意ください

主人公がころころ変わります、ご注意ください

ほぼ完璧オリジナル小説です、見切り発車なうえ創作苦手（なんで書いたし）なのでたびたび止まります

数年単位で書く可能性しかないので、待てない方はご遠慮ください
なお、ほぼ完璧に構想だけでスタートしたので主人公像すら決まっております

「なんとかなるよ！」がモットーです、よろしく

全ての始まり

世界でただ一人、「異能」と呼ばれる力を持つ僕

この世にはありえない現象を起こすことのできる力

昔はたくさんの人たちがこの力を使えたらしい

超能力
ESPや魔術・魔法、小さな物で言えば強力な第六感などのことを
総じて「異能」という

科学が発展し、隠さなければならなくなった力

科学の便利さにより新たな「異能」も必要なくなった

新たな力は生まれず、力を持つ者は影に生き脈々とその力を受け継
いできた

僕はその力を持つ最後の者だ

影の住人は皆寿命や迫害により消え、最後の子となった僕に全ての
「異能」が与えられた

僕はこの力で調べた、まだ僕と同じような者が残っていないかと

僕はこの力を憎んだ、孤独になるための力などいらないと

それから数年ほど経った時、僕は思いついたんだ

この世界を壊し、新たな理を生み出そうと

全ての者達に平等に、しかし差別的に

各人が一つの「異能」の力を持ち、この世界の理を捻じ曲げればと

僕は新しい世界を創造した

もちろん僕は記憶を持ってその世界の一人となる

これから数百年後にわたり、その世界は続いた

全ての始まり（後書き）

- 近況 -

10月よりスランプ脱出、書き始めました
なんとか・・・なるといいなあ・・・

過去の記憶（前書き）

作者はたびたびスランプに陥ります、ご注意ください
主人公がころころ変わります、ご注意ください

過去の記憶

家は首都の暗い路地裏に異次元空間を発生させ建っている。

『異能』の力を持たない者は見えないようになっていて、入ろうとすれば神隠し（正興へ）にあう。

『異能』の力を持つ者は既に僕を含めて四人だけとなっていた。

「母さん、シア姉。帰ったよ・・・」

気が重い僕は家に帰ると、母親と姉に声をかける。母さんは振り返ると姉の手に持った黒猫に視線を送る。姉は”それ”を生き返らせようと必死だった。

「なんで！なんでよ!？」

”それ”は僕らの父、アルバード・ウエリアスの獣化した姿であった。

体はぐったりとしており、生気がない。姉は自身の持つ治癒能力を”それ”に使い続けている。

母さんは悲しそうな目をしているが、もとより覚悟があったようで絶望の表情はしていない。

「ねえ、シユー・・・」

いつの間にか治癒を放棄し僕を見つめている紅い瞳。銀色の髪によりさらに強調されて強く光る。

「貴方のあの能力で治せるんでしょう？早く・・・」
動けない、動かない。

「さあ、早く治して・・・」

確かに、治せた……。せめて死んでしまっ前なら。

「早く！」

姉からスツと視線を外すと母さんに向き直る。

「母さん、ごめん」

そつとぬくもりが頭を覆う。しっかりと抱きしめられた中でも僕は泣けなかった。

僕と父親の仲は悪い。もうとてつもなく悪い。顔を見せれば殴り合い、名前が出れば吐き気を催す。

なぜかと聞かれると虐待されたからと答えるしかない。

父は姉を愛し、母は僕を愛した。父はそれが気に入らなかったのだろう、三歳より僕は虐待を受けていた。

それが終わったのは七歳の頃、僕の力が発現して父親が傷を負った。父親は暴力を振るうことはなくなったが、僕は家を追い出された。母さんに。

二人が殴りあいになったことが原因だ。双方とも大怪我を負い、姉に治された。

母さんは僕を守った、遠ざけるという選択で。

僕は父親が嫌い、姉も嫌いだった。代わりに母さんに愛情を求め、注いだ。

十歳になったある日、母さんから手紙が届いた。

『アルが死にそうなの、助けて』

ただそれだけで、僕は迷った。迷いに迷い、やっと決心したのが今日。母さんの願いだからと自分に言い聞かせ家に帰った。

父親は『異能の使いすぎ』によって獣化しすぎたツケが回ってきたのだろう、体が耐え切れなかった。

姉の治癒により生きながらえていたのだろう、僕が帰る数時間前には生きていたらしい。

「貴方のせいで死んだのよ」

「もう少し早く来れば」

「クズ」

姉はそんな言葉をかけ、父親が死んだ翌日には息を引き取った。

母親は家族を二人失ったことで心が壊れた、もう治らないほどに。手は尽くした、だけど”時間の流れは変えることができなかった”。

でも僕は母さんがいればそれでよかった、生きてさえくれればそれでよかった。

だけど・・・

母さんは死んだ、首を吊って。

絶望が僕を襲う、そばにいてくれた者はもういない。

悲しみが僕を襲う、抱きしめてくれた者はもういない。

そんな僕に・・・母さんが死んだことである異能が発現した。

もともとの僕の能力は『生者の時間を巻き戻す』こと、そして『時間の波』で攻撃すること。

新しい異能は『理を生み出す力』。

だから僕は・・・自身の時間を・・・巻き戻した。

過去の記憶（後書き）

- 近況 -

前話と同日投稿により省略

生まれた世界（前書き）

作者はたびたびスランプに陥ります、ご注意ください
主人公がころころ変わります、ご注意ください

生まれた世界

自身の時間をまき戻した場合どうなるか？

理の力を持たない状態で時間をもどってしまい、記憶を忘れる。

（『理を生み出す力』さえあれば時の流れを変えられたのに・・・！）

僕はもう一度同じ運命を辿ってきた。

父親が死に、姉も息を引き取り、母さんは自殺した。

そして理を使った時間に戻り・・・記憶の逆流が僕を襲う。

「ぐああああああ！！」

まったく同じこととはいえ、一つの人生を頭に入れるのはつらい。

（確かに過去を変えてしまえば頭は耐え切れないよなあ・・・）と初めて思っ、視界が暗転した。

それから数時間はただだろうか、母さんが目の前にダランと垂れている。

もう数十年分の期間を過ごした精神は悲しみこそすれ、壊れることはなかった。

それから数年、庭の花壇で食材を取り井戸から水を汲む。

食べて寝る、ただそれだけを続けた。もう年齢も数えていない。

友人と呼ばれる者は出来なかった。親がいない子供、捨てられた子供。そう周りに認識されていた。

話しかけてくれた者は、いた。足を怪我した者の”足の時間を巻き戻したが怯えて去っていく。次の日には魔女狩りよろしく討伐隊が結成されていた。僕はその時より外の世界に出ていない。

(ねえ、僕は何か悪いことをしたのかな?)

(ねえ、僕はこれから何を支えに生きればいいのか?)

(ねえ、僕が受け入れられる世界はどこ?)

そして僕は考えた。

考えて考えて考えて、
考えて考えて考えて、

「そうだ、世界を創ろう」

(僕のように異能を)

(一つだけでいい、どんな力でもいい)

(ただ一つの『異能』を)

(全ての人間に『異能』を、その人”唯一の力”を)

(そうすれば平等で、みんな僕を怖がらない)

(僕のこの力もいらない)

(ただ、僕は心のよりどころが欲しい)

(ああ、この科学も消してしまおう。皆が進歩する世界へ)

「この世界を壊し、新たな世界の理を生み出そう」

そして世界は創りかえられた。

人々は唯一の『異能』を持ち、科学の消えた世界へ。
記憶を忘れ、新たに生み出される命。

人々は忘れた、万能の力を持った科学を。

ところかわり、ここは森の中。

生き物の声と植物の香り。

ここから人は、新たな時代を築いてゆく。

生まれた世界（後書き）

すみません、なんかいきなり矛盾が・・・
気にせずに書きます・・・;;;

- 近況 -

前話と同日投稿により省略

最弱の異能？（前書き）

作者はたびたびスランプに陥ります、ご注意ください
主人公がころころ変わります、ご注意ください

最弱の異能？

朝、まるでアマゾンのような密林で目を覚ます。

俺はいつもの様に夢じゃないことを再確認して藁のような物で作られた寝床を後にする。

「いつ見ても慣れないなあ・・・」

1990年、東京と呼ばれる都市に誕生した俺はすくすくと健やかに育ちそれなりの家庭でそれなりの人生を歩んでいた。

転機が訪れたのは大学2年の夏、俺達「異常現象研究会」（よくもわるくも常識外なことから）通称：異常研と呼ばれるサークルの合宿を行っていた。

テーマは『一部地域での神隠しについて』で、神隠しが頻繁に発生するスポットの調査をしていた。

どっかのバカ会長が周りの制止も聞かず、面白そうだから！と怪しげな石に触れたとたん俺はこの世界に生まれてきた。

いや、頭は良いんだあの人。面白そうなのが第一、楽しいことも第一、自分のために自分の人生を費やす”我が道を往く”典型的なタイプだ。

話がそれたな。

まあそんなわけで転生してきたわけではあるが異常研メンバーはここには住んでいない様だ。

あの人たちなら俺とは違って異常な行動にためらいが無いからいまごろ神童と呼ばれていることだろう。

あれは一歳の頃だっただろうか？

「いまだ「おぎゃあ」しか喋らなかつた俺は考え抜いた末、周りの子供達の行動に沿って生きてきた。」

この異世界で生きていくための決断だった。

おかげで周りから浮くことも無く、平凡な毎日を送っていた。

「おはよう、かあさん、とうさん」

朝食の用意をしていたとうさんと朝の狩りから戻ってきたらしいかあさんに挨拶をする。

「おはよう、ミコト」

「シャツシャツシャ、今日はドブギが獲れたぞ！喜べ！」

前者はとうさんであり、後者はかあさんだ。

もちろんこの世界での常識は”父親が狩り、母親は家事をする”のであるが、うちはかあさんの方が男らしい。どこに惚れたんだとうさん……。

求婚したのはとうさんだそうだ。かあさんは性格がアレだが容姿はいい。体が目当てで「言い寄る男は居たようだが全部返り討ちにした」と子供の頃武勇伝を語ってくれた。

「とうさん」

「なんだいミコト、不思議そうな顔して。ボクの顔のどこがおかしいかい？」

なんだろう、非常に寒い、冷や汗が止まらない！

「いや、かあさんのどこが好きになったのかなあ……と……」
途端に寒気は消えて、どこか熱っぽい眼差しでかあさんを見るととうさん。なんだろう、とても乙女っぽいぞとうさん。

「まだミコトにはわからないだろう……。そうだな、あと五年くらいしたら教えてやるう」

俺は不思議そうな顔で木でできた小さなテーブルに着く。
おいしそうな朝食の香りに思わず頬を緩める。

まあ、そつだよな。だって俺いま十歳だし。

最弱の異能？（後書き）

主人公変わりました。早いですね^^;

一応大分構想は固まってきました。ラストの終わり方も・・・

ただ・・・途中が書けない私としましてはいまだ不安が残ります・・・

・

最弱の異能？その二（前書き）

作者はたびたびスランプに陥ります、ご注意ください
主人公がころころ変わります、ご注意ください

あれ？前話で「最弱の異能？」について書くはずが父母の話に・・・

最弱の異能？その二

突然だがこの世界の話しよう。

この世界、なんと魔法や超能力が使えるファンタジー世界なのだ！
どうだ、驚いただろう。

それらはまとめて『異能』と呼ばれている。

俺が観察した普通の子供の教育課程を見ていくところなる。

【言語能力が身につけてくる】

〇歳～一歳

【各家庭で健やかに育てられる】

一歳～六歳

【小学校のようなところで勉強する】

六歳～十歳

【各異能を伸ばすための訓練をする】

十歳～十二歳

【就職先を探し、職場体験をする】

十二歳～十五歳

【成人し、異能などを使い給料を貰う】

十五歳～

俺は現在小学校に通っている。

正確には今日までなのだが、いまはまだ学生という身分だろう。

十歳になると王城で診断を受けて自身の『異能』を知り、能力を伸ばしてそれに合った就職をするというものだ。

実はひそかに楽しみにしており、そして恐れていた。

「とうさん、かあさん。行ってくるよ」

ドブギ（猪風のブタ）の冷シャブとサラダを食べた後、学校へ行く準備を終えてとうさんとかあさんに出かける旨を伝える。

「ああ、いつてらっしゃい。楽しみにしてるよ」

「おう、いつてこい。どんな『異能』か楽しみにしてるぜ」
何度も言っがとうさんが前者、母さんが後者である。

木造の小さな小屋を出て歩いていくと村のど真ん中にある小学校に着く。学年ごとに分けられた教室に向かう。

「おはよ」

俺は挨拶もそこそこに自分の席へ向かうと教室を眺める。
皆一様にはしゃいでいて、少し楽しい気分になってくるのが不思議だ。

「おはようございます、皆さん」

例の黒板消しトラップに今日も嵌った先生（独身女性）は、黒板消しを頭に載せたまま無表情で挨拶をする。

「これから王城に向かいますが、欠席者は」

教室を見回し、クラス長に確認を取る。

「いないようですね。では向かいますので一列に並んで校舎を出ましよう」

俺達は避難訓練のように統率された動きで校舎を出る。

皆、思い思いに頭を下げたり涙を目じりにためていたり、果ては両手を組み拜んでいるやつまで居る。

「また帰ってくるのだから後にしなさい」
先生は軽く注意すると初めて微笑んで先導する。

もちろん男子生徒数名は惚けたように数秒間その場を動けなかった。

三時間ほどかけて歩いて行くと、王都と呼ばれる街が見えてきた。
移動中は先生が『青い炎』で魔物を撃退してくれた。強すぎる。

王都に着いた学生一行は王城の庭に座っていた。
他の学校の生徒もいるため、数百人はいるはずだ。庭が埋まらない
ことに恐怖を感じる……。

「では！これより『異能』を発表する！」

騎士団、それも高い身分だろう人物が壇上で叫んでいる。

「呼ばれた者は前へ出て来なさい。異能名を発表し、発表された者
は右手のローブの男達から使い方を学ぶように！」

学生は一斉にローブの男達を見る。何年もやっているだろう男は動
じず、今年からだろう男は微妙に笑顔が引き攣っている。

「一番！アリカ・ウィールズ」

「はい！」

呼ばれた女の子は壇上に上がり異能の発表を受ける。

「汝、『戦乙女ヴァルキリー』として困難に立ち向かうべし！」

「！？はい！」

予想外だったのか、少し戸惑ったようにも見えたが、元気良く返事

をすると右手に向かう。

それ、ジヨブ名じゃ・・・とはさすがに言えない俺は黙っていた。

「十五番！オガ・オールド」

「はい」

呼ばれた男の子はよく知る名前で、この世界に巻き込んだ張本人だった。つまり異常研会長である。

「汝、『真理』として真実の究明をするべし！」

「はい」

まったく感情の籠ってない目で生徒を見渡すと、右手に去っていった。

去り際にニヤリとした笑いを浮かべていたのが気になる。

「八十四番！ミコト・アールレイ」

「はい」

前へ出て壇上にかかる。

「汝、『運』として、頑張れ！」

「え！？何もなし？」

子供達が笑い声を上げる。ちくしょう。

「これは私にもわからん」

「はあ」

俺は逃げるように壇上からそそくさと降りるとロープの男達の方へ歩いていった。

最弱の異能？その二（後書き）

若干無理やりです

設定混ぜると読みにくくなりますね、多分。

ということ、『運』でした。次回能力公開します。

- 近況 -

前話と同日です。

3日更新で安定でしょうか。ではまた。

最弱の異能？その三（前書き）

作者はたびたびスランプに陥ります、ご注意ください
主人公がころころ変わります、ご注意ください

最弱の異能？その三

「よう、久しぶりメイ君」

「はぁ・・・」とため息をつきたくなる。いや、もつついた。

「やっと会えましたよ。どこに居たんですか？」

俺は会長の声に振り向きながら疑問を投げかける。

「ふ・・・、王城にいたに決まってるだろう」

ジト目を向け続けても会長の態度、変わらず。

「ちよっと待つててください。『運』の説明聞いてきますから」
踵を返しその場を去ろうとする。

「待て待て、そうつれないことを言わずこれを見る」
肩をつかまれ強制的に「顔が近い！」

ドンッ

吹っ飛ばされてしりもちをつく俺、理不尽だ・・・。

「まさか恋人なのか！？そうなんだな！？（私にもなびかないし・・・）」

最後の一言、会長にはどうやら聞こえていないようだがバツチリと俺には聞こえた。

「彼女誰ですか？」

「あれだ、ストーカー」

「ああ、なるほど。会長もてますもんね」
ポソポソと会長に確認を取る。

「ちつつつつがああああう！！！！」

「と、言つわけよ」
「いや、説明してない(だろ)」「
あっさり終わらせようつたつてそうはいかないぞ、殴られた痛みは
怖いんだぞ。」

気を取り直して話を聞くと、どうやら彼女も異常研のメンバーで【
湯沢 有華】というらしい。

会長の幼馴染で合宿にはこっそりついてきたらしい(ストーカー
とも言つ)。
いつも【轟 御我】会長と共にいる女の子のことを気に食わなく思
つていたらしい。

「確かに俺は【秋雨 命】という名前はあります。」「ミコト」を「
メイ」と呼ばれていたせいで女だと思つのは分かります。ですが！」
ビツと俺を指差す。

「俺のどこに女と見られる部分があるんですか!？」
「いや、どこからどう見ても女の子にしか見えない(から)」「

二人揃つて否定された。

最弱の異能？その三（後書き）

シクシク、書きにくいよう)

設定きちんとして無いからキャラがぶれまくる・・・

なんと世界観設定もいまだ決まってるな・・・んでもないです

- 近況 -

特に何も無いという平凡な日常を淡々と(r)Y

最弱の異能？その四（前書き）

作者はたびたびスランプに陥ります、ご注意ください
主人公がころころ変わります、ご注意ください

なぜかタイトルからかけ離れていく、どうしてこうなった

最弱の異能？その四

「前回までのあらずじ」

俺達「異常研」は神隠しスポットの調査のため合宿中。

御我会長が怪しげな石に触れたとたん異世界に転生したのです。

少年はミコトという名を授かりすくすくと育っていきました。

小学校の卒業日、各自の『異能』を知るために王城へ来て審査・発表された。

そこで俺は御我会長とその幼馴染・有華と出会う。

彼女はこっそりと合宿についてきており、巻き込まれたらしい。

以前から気になっていた、「メイ」という女性が目の前に現れたのでついついやってしまっただとは彼女の弁。

俺のどこが女に見えるのか、それは全てだ！と言われました。

「おい、いい加減現実を見る」

会長、俺はいまそれどころではないのです。

「う、ごめんなさい。まさか男の人だとは」

有華さん、その慰めは心に痛いです。

数十分経過

「そついえば会長、あとの二人はどこにいるか分かりますか？」

やっと立ち直った俺は異常研メンバーの二人、【舞島^{まいしま}光^{ひかり}】と【舞島^{まいしま}影^{かげ}】の所在をたずねていた。

「問題ない、彼らは既に確保している。おい、連れて来い」

「はっ！」

会長は後ろに居た騎士に合図を送る。

「会長、何者？」

「オガ・オールド。国王ブライアン・オールドは俺の父に当たる」
えーと、つまりあれか、王子様？

俺が驚愕の表情を浮かべたのが分かったのだろう、有華さんがふんぞり返っている。

「わたしはアリカ・ウィールズ。宰相アダム・ウィールズがお父さんで、オガ・オールドの婚約者よ（わたしはてっきり『王子様の婚約者』とか『次期王妃様』とかだと思ったのに・・・）」

俺にはばつちり聞こえてます、もちろん会長は気づきませんとも。最初の子が戸惑っていたけど有華さんだったのが。

「そしてミコト・アールレイ。勇者ウィンディ・アールレイと巫男アルフレッド・アールレイの息子」

「え？」

会長の言葉に思わず聞き返してしまった。

俺のとうさんが巫男？普通巫女って女の人じゃ・・・。

しかもかあさん勇者かよ、あの強さから想像内のことだけど。

「信じられなければ両親に聞いてみるといいさ。ただし、聞くなら巫男のところは深く聞くな。隣国のジス国が消えた理由の九割は女顔を馬鹿にされたアルフレッド氏の策謀のせいと聞く」

「あのとうさんの迫力はそれか！俺の女顔は遺伝か！」

ああ、ついに認めてしまった。ちくしょう。

「大丈夫だ、元の世界でもメイ君は女顔だ」

「わたしが間違える位には女の子らしかったよ、ミコト君」

いじけている俺に有華さんが話しかけてくる。

「ところでミコト君」

「なんですか？」

「御我とそういう関係？」

すこし顔を赤らめながら聞いてくる。なにを想像してるんだなにを！

「ち・が・い・ま・す！」

「そ、そう・・・（ちよつと残念）」

残念ってなんだ。好きな男を男に取られていいのか？女はよく分からないな。

コンコン

「はいつてます」

「はいつてるわ」

「会長も有華さんもトイレじゃあるまいし」

ガチャ

「おはよう」「そして」「こんばんは」

うわ、めんどくさいやつが来た。無事で良かったけど。

最弱の異能？その四（後書き）

あ・・・れ・・・

どんだん話がそれていく！？

どうしてこうなった！

最弱の異能？その五（前書き）

作者はたびたびスランプに陥ります、ご注意ください
主人公がころころ変わります、ご注意ください

能力の説明に至りません、なぜだ・・・。

最弱の異能？その五

向かって左、右手の親指を立て自身を指す影。

向かって右、右手の人差し指を唇に当て少しかがむ光。

「舞島影と」「舞島光で」「マイ姉妹」

両手を広げ光の後ろに隠れる影。

鏡写しのように光も両手を広げ。

「影と」「光で」「ハゲピカリ」

これだから面倒なんだ！

「誰がうまいこと言えと！あとハゲな人が可愛そうだろ！」

「愛も」「変わらず」「いい突込み」

「アイの意味が違う！どこに突っ込むんだ！」

「「やゝらしい」」

「あああああ！！！」

頭を全力でかきむしる。会わなきゃ良かった。

「そこら辺でからかうのは止めておこう。メイ君が壊れそうだ」

「「ミコト（さん）なら大丈夫」」

いい顔でサムズアップ。「ミコト」は影で「ミコトさん」は光だ。

キラリと光る歯がまぶしいぜ……。

「ミコト君、頑張れ」

涙をぬぐいながら俺を慰める有華さん。ありがとう、俺のこの苦勞を分かってくれて……。

仕切り直した俺達五人、まずは影と光の自己紹介から。

「カゲ」「ヒカリ」「アイム・ヒューマン」「
それは分かってるから!」
「カゲ」「ヒカリ」「愛 ピーマン」「
「ただだけピーマン好きなんだよ!」
「実は大ッ嫌い」
「そうか・・・」

「「本当は捨てないと」」
「ステナイトでいいんだな?」
「「ステライト」」
「捨てないとネタはもうやらんでいいからな」
「まったく」「ミコトさんは」「仕方ない」
「影と光に言われたくないわ!」

カゲ・ステライト、ヒカリ・ステライト。ステライトか。

「ステライトって隣の国の名前だよな?」
「会長もち」「有華の」「影と光ロン!」
「何三人麻雀してるんだよ!会長と有華さんも乗らない!」

はあ・・・はあ・・・
「「「息が荒い変質者」」」
「誰のせいだ!」

数分経過・・・

「それで、光と影は隣の国の姫ってことでファイナルアンサー?」
「そうですね、ワタシも驚いたのよ」
「ボクは当然だと思っけどね、可愛いし」

どうやら顔と名前は元の世界に準拠しているらしい。五人とも特に変化は無いようだ。

それにしても五人中三人が王族。しかも五人の親は世界的に発言力の有る人物、か。

「別の話になるんですがいいですか？」

俺は手を上げて発言の許可を求める。

「かまわないが、なんだ？」

会長の許可を貰いずっと気になってたことを聞いてみる。

「俺、有華さんのこと見かけたこと無いんですが、本当にメンバーなんですか？」

「！！」

バツ！つと有華を見る影と光。余談だが影が姉、光が妹だ。双子だから気にしても仕方ないけど。

「え？そ、それはね・・・」

有華さんはあわてながらも語りだした。

最弱の異能？その五（後書き）

能力（ry

なぜだ・・・どんどん流れていくぞ・・・

有華の恋心（前書き）

作者はたびたびスランプに陥ります、ご注意ください
主人公がころころ変わります、ご注意ください

タイトル変更、長すぎる

有華の恋心

「と、いうわけなのよ」

「光黙ってる」

ふざけた光の口を強制的に封じる。

「あれは大学一年のとき……。」

当時のわたしは何をするでもなく、無気力にすごしていた。

輝いていた世界もまるで色を失ったように。

きらきらとした過去の思い出にとらわれて、現実を見ようとはしていなかったの。

東山大に入ったのは学校の先生に勧められたから。

「ここなら君みたいな子でも入れるだろう」って、その時のわたしには蔑まれているように感じたわ。

もちろんそんなことは無くて。わたしのことを心配してくれている、ちよつと無愛想で人付き合いの苦手な先生だったんだけどね。

この大学のシステムを見たのは入ってからよ。

年に何度か学校に来て、レポートさえ提出すれば単位をくれる。

だからわたしの引きこもりになおさら拍車をかけたの。

元々人見知りだったうえ、中学の頃から仲のよかった数人は別の高校。

高校では入学式の日には骨折して入院。

ギリギリ進級できるだけの日数は取れたけど、グループに入れなかったわたしはどんどん孤立していったの。

学校には来ていたのだけど、三年生にもなるとまわりがピリピリし

てきて学校に行きたくなくなった。
それからはずっと引きこもりのような生活で……。

そして大学一年の夏。

夏休み中にレポート提出のため学校に来たわたしは、途中で呼び止められたの。

「ちょっとそこのお嬢さん。私と共に異常現象研究会を作ってみないかい？」

壁に寄りかかり、キザなセリフと共に前髪をかき上げるその仕草が妙に似合っていた。

わたしはそんな物に興味は無かった。

ただ、もしかしたらこの『変な人』がわたしの人生を面白く、おかしくしてくれるんじゃないかって思ったの。
だから……。

「わたしは滅多に顔を出さないわ」

キザ男は黙って聞いていた。沈黙は数秒。

「それでもいいなら、入ってあげるわよ」

途端、彼の表情が一変したの。まるで子供のような笑顔だった。
その時、彼に恋をしたの。

それからしばらく経って、彼は幼馴染だっということが分かったの。
奇しくも初恋の子と同一人物だった。

ああ、これは運命だっ。本気で信じてた。

考え事をしている時の、真剣な表情。

分析するときの、無感情な目。

喜びを全面に表した、とびっきりの笑顔。

まるで子供のような、無邪気な行動。

すべてを見通すような、切れる頭。

すべてに惹かれて、すべてを愛した。きらきらの日常を取り戻して
いった。

学校にも徐々に行くようになって、異常現象研究会は二人だけで、
まるでデートみたいに。

思い切って告白しようとした春、事件は起きたのよ。

彼を呼び出すつもりで、下駄箱にラブレターを入れようとしたの。

『轟 御我さん

話したいことがあるので、

放課後に校舎裏の桜の下まで来てください。

お待ちしております。

有華』

少し硬いかな、でもこれ以上書いたら恥ずかしい。

不安と期待でごちゃ混ぜになりながら彼の下駄箱に向かったのよ。

そこには、黒髪のショートで可愛らしい顔立ち、身長は彼の頭一個分小さくて、オーバーオールを身にまとった可愛らしい女の子。仲のよさそうな雰囲気、とてもじゃないけど近づけなかった。

もしも彼女が彼女に振り向いても、彼女が悪いわけじゃない。それは十分に分かったの。

ただどね、やっぱりわたしは彼女になにかしちやいそうで、学校にも来なくなった。

だから……。

有華の恋心（後書き）

し・・・しりあすう・・・
なんか重いつす・・・自分、堪えられる自信がないです

有華の闇心（前書き）

作者はたびたびスランプに陥ります、ご注意ください
主人公がころころ変わります、ご注意ください

なかなか本題に入れない件

有華の闇心

ある日決心した。

応援できないのなら

それでも気になるから

貴方のことを影から見守っていくの

その日からわたしはアルバイトをし始めた。

そして学校の様子がよく見えるアパート（防音）に住むようになった。

両親は反対したけど、一生懸命説得した。

望遠鏡と、双眼鏡。あとはスタンガンに、スナイパーライフルとサプレッサー。もちろん弾薬はゴム弾で。

防弾（防音）ガラスに変えて、部屋の内装は乙女チックに。

朝三時に起きて、新聞配達。

朝五時に配り終えて、朝食。

朝八時までスナイパーライフルを構えて張り込み。彼の半径一メートルの女子は射撃。

朝九時から喫茶店でバイト。

昼十二時に自宅で軽食。昼食を一緒に食べようと近づく女子を射撃。昼二時から非合法組織でのバイト。主に射撃訓練。

夕方四時、部室でいちゃついている二名を射撃。彼もやってしまったが問題なし。

夜七時からレストランでバイト。
夜十時に上がり、よってくる男にスタンガンを浴びせる。帰宅後睡眠。

こんな生活を半年近く続けていたある日。

女子生徒二名が彼に接近、しかしわたしに敵対する様子は無し。少しなら近づいても許すことに。

一年後、ますます仲良くなった二人と女子生徒二名。

夏休みに合宿という名のいやらしい試みを発見。

ただちに合宿先へ潜伏。長期バイトとして宿屋の仲居となる。

彼と女子生徒三名が泊まる三日間を有給としてもらい、彼らの張り込みを行う。

彼が女子生徒三名の制止も聞かずに不思議な形をした石に触れた途端、閃光が走る。

そしてわたしは……。

「おぎゃあ」

え？

わたしは幼児になっていた。

そこから子供へ、婚約者となった彼と会ったの。とてもとても嬉しかったわ。

ああ、この世界ならわたしは彼と恋人に、家族になれるんだって。

でも……そう、可愛い可愛い彼女が来るまでは。

有華の闇心（後書き）

有華編終了！

ちよつと持ち直したかな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6137x/>

平等に差別される世界で

2011年10月22日02時09分発行